

<授業実践2> 「言語文化」書くこと

1 指導と評価の計画

科目名	言語文化	学年類型	1年	単位数	3単位	話すこと 聞くこと	
単元名	「あづま下り」に沿ったPRパンフレットを作成しよう					書くこと	○
教材	『伊勢物語』 「あづま下り」					読むこと	
単元の評価規準							
知識・技能		思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度			
<p>・我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。((1)のウ)</p> <p>・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。((2)のイ)</p>		<p>「書くこと」において、自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にしている。(A書くこと(1)のア)</p>		<p>伊勢物語を用いて、物語に描かれている土地のPR文を書く活動を通して、読者を想定し、PR文を書くための題材や内容の選定に粘り強く取り組み、条件に合う文章を書こうとしたり、他者の意見やPR文を参考にしたりすることを通して自らの学習を調整しようとしている。</p>			
主たる言語活動							
『伊勢物語』を用いその土地のPR文を書く活動							

時間	授業のねらい・学習活動	重点項目			評価方法
		知	思	態	
1 5 3	教材文（『伊勢物語』 「あづま下り」）を理解する。	○			記述の点検 (ノート・ワークシート)
	①単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。				
	②『伊勢物語』という教材について理解する。 ③本文を通読し、主人公の状況、和歌に込められた思いを理解する。				
4	伊勢物語を用い、その土地の観光PR文を書く。		○		記述の点検 (作品の第一稿)
	④テーマや対象、担当箇所を選択し、PR文を作成する。				
	1：6、7名のグループをつくり、どの土地を担当するか決める。 2：テーマ、PRの対象を決める。 3：それぞれの土地に分かれて、PR文を作成する。				
5	他者のPR文を読み、選定する。			○	○
	⑤他者のPR文を読み、互いに意見や改善点を伝え合う。また、仮想読者に題材のどのような点を伝えようと工夫したのか報告する。				

6	<p style="text-align: center;">自己のPR文と他者のPR文を用い、 一つのパンフレットを編集する。</p>				<ul style="list-style-type: none"> ・記述の分析 (作品の最終稿) ・記述の分析 (振り返り・自己 評価シート)
	⑥他の生徒の意見や作品を踏まえ、自分のPR文を修正する。 ⑦自分のPR文とグループ内の他の生徒のPR文を一つのPR文集に編集する。 ⑧振り返りと自己評価を行う。		◎	◎	
	⑨定期考査	◎	◎		定期考査

※重点項目の欄について、指導に生かす評価には「○」を、記録に残す評価には「◎」を付す。

ルーブリック

	A	B	C
思考・判断・表現 (第4次)	テーマと伊勢物語の関連性が深く、 さらに対象の興味・関心を引くPR 文を書いている。	伊勢物語を踏まえ、テーマや対象に 応じたPR文を書いている。	テーマや対象に合わせ、PR文を 書いている。
	レベル3	レベル2	レベル1
主体的に学習に取 り組む態度 (第4次)	学習の調整(態度α) 他者の意見などを踏まえて、より多 くの人に自分が伝えたい歌枕や題材 の魅力が伝わるように改善しようと している。	他者の意見などを踏まえて、自分の 記述の改善点に気づき、具体的に改 善しようとしている。	他者の意見を踏まえて、自分の記 述の改善点に気付こうとしてい る。
	粘り強さ(態度β) 対象となる仮想読者を具体的に意識 し、文章の構成だけでなく、文体や 作品全体の構成まで仮想読者の興味 を引く工夫を凝らしPR文を書こう としている。	対象となる仮想読者を具体的に意識 し、仮想読者の興味を引くPR文を 書こうとしている。	テーマや対象に合わせたPR文を 書こうとしている。

主体的に学習に取り組む態度 総合評価シート

[態度α] 自らの学習を調整しよう とする側面	レベル3	B	B	A
	レベル2	B	B	B
	レベル1	C	B	B
		レベル1	レベル2	レベル3
		[態度β] 粘り強い取組を行おうとする側面		

2 研究の実際と考察

(1) 研究の実際

『伊勢物語』「あづま下り」で描かれる三河八橋、富士山、隅田川からいずれか1か所を選び、その土地のPR文を作成する活動を設定した。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の双方を意識しながら行うことで、よりよい成果物に仕上げることが目指した。「個別最適な学び」の中でも特に「学習の個性化」を意識し、題材やPR対象、成果物作成で使用するICTツール（ロイロノート・スクール（株式会社LoiLo、以下「ロイロノート」と表記）及びTeams）の選択を生徒に委ねることで、活動への興味・関心を高め、主体的な学習につながるようにした。

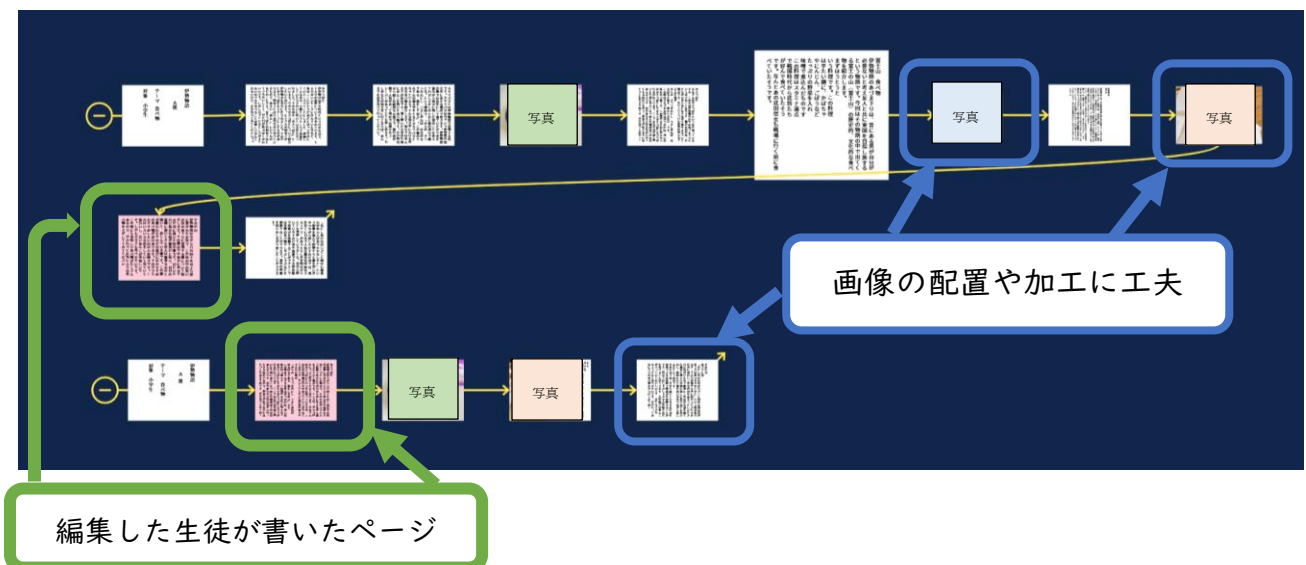
第1次は、作品の読解に重点を置き、『伊勢物語』の特徴や「あづま下り」の本文内容の理解を促した。その上で、第2次以降の言語活動へとつなげた。

第2次は、最初にクラスの生徒を6、7人のグループに分け、それぞれの生徒が三河八橋、富士山、隅田川のいずれの土地を担当するかを決めた。次に、グループごとにPRのテーマや対象を決め、それに基づいて各自で担当箇所のPR文を作成した。作成後、第3次の相互参照に向けて、振り返りシートを用い、各自が工夫した点を確認した。活動に当たっては、個々の生徒の担当する土地に対する興味・関心に応じて情報を集めたり、使用するICTツールを選んだりするよう促した。グループの人数を6、7名としたことで、同じ土地を複数人が担当することになるが、それによって情報交換が活発になったり、欠席者がいた場合も授業が円滑に進められたりするという利点があった。

第3次は、第2次に各自で書いたPR文をグループで読み合い、意見や改善点を伝え合う活動を設定した。PRする対象に対してどのような工夫をしたのかを互いに報告することで、新しい視点を獲得することを促した。

第4次は、三つの活動を設定した。最初に、第3次での意見交換の内容や他の生徒が書いたPR文を読み、それらを参考にして自分のPR文を修正した。次に、自分の担当と異なる場所のPR文をグループの他の生徒の作品から選び、テーマに沿ったPR文集として編集した。最後に、活動の振り返りと自己評価を行った。PR文集の作成に当たっては、個人が作成したPR文のデータの共有や編集の場としてICTツールを活用した。編集されたPR文では、同じグループであっても、他のメンバーの文章をどのように利用したか、各生徒の違いを見ることができた。活用するデータは同じであっても、ページ数の違いや使用する画像の配置や加工などにそれぞれの生徒の工夫が見られた（資料1）。

【資料1】



(2) 評価について

「思考・判断・表現」については、各自が作成したPR文をクラウド上に提出したものを評価した。B評価(おおむね満足できる状況)を「伊勢物語を踏まえ、テーマや対象に応じたPR文を書いている。」と設定し、A評価を「テーマと伊勢物語の関連性が深く、さらに対象の興味・関心を引くPR文を書いている。」とした。また、C評価は「テーマや対象に合わせ、PR文を書いている。」と設定した。以下に生徒が作成したPR文を示す。

【B評価】

テーマ「お勧めスポット」 対象「先生」

『伊勢物語』の「すみだがは」は、主人公の在原業平が都を離れて東国へ旅をする話です。旅の途中で、恋人と別れてしまって、そんな悲しい思いをもって隅田川を渡ります。その時、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥」という歌を詠み、失った恋人への思いや都へのなつかしさを表しています。在原業平の旅は心の葛藤や、孤独もありました。この歌はとて有名で、今でも多くの人に親しまれています。現代の隅田川には、この歌にちなんだ「言問橋」があり、歴史を感じとれる場所です。さらに、毎年夏には、「隅田川花火大会」という大きなイベントがあります。そこには多くの人が花火を楽しみに集まります。また、「隅田公園」では春に桜が咲きよくお花見がされています。

上記のPR文は、伝えたい内容が明確であり、『伊勢物語』にも触れられているのでB評価とした。

【A評価】

テーマ「観光スポット」 対象「子供」

伊勢物語の「あづま下り」の主人公、在原業平くんが旅したたくさんの場所の中には、日本で一番大きい山である富士山があるよ！ そんな富士山は、業平くんが旅中に歌った和歌にも登場してくるんだけど、みんなは富士山の大きさを知っているかな？ 現在の富士山はなんと、およそ3776メートルもあるんだって！ ちなみに業平くんは、富士山を初めて見たときに比叡山（現在はおよそ848メートル）っていう山を二十個も重ね上げたくらい大きく見えたんだって！ それくらい富士山の大きさには魅力があるんだね。業平くんが富士山を旅した時は、五月の終わりのころだったらしいんだけど、富士山のとっぺんにはまだ雪が積もってたんだって！ 冬はもうとっくに過ぎていのに不思議だよね…。今もまだ雪が積もっているのかな？ 雪がまだ積もっているか気になった子は富士山を見に行ってみてね！ もしかしたら、業平くんがそこで待っているかも…？

上記のPR文は、読者に伝えたいテーマや題材が明確である上に、『伊勢物語』を読み手の興味・関心を引く手段として効果的に活用できている(執筆者下線)。また、『伊勢物語』の本文、内容に深く関連して書かれている部分も評価できるためA評価とした。

「主体的に取り組む態度」については、「学習の調整」と「粘り強さ」に分けて振り返りシートで評価した。「学習の調整」の側面では、協働的な学びの活動を通して自らのPR文を客観的に見つめて改善を図ろうとする姿勢を、「粘り強さ」の側面では、作品に対する完成度を高める姿勢を見て取ることができた。

(3) ICT機器の活用について

今回の実践では、成果物(PR文)及びグループでのPR文集の共有・作成において、ロイロノートとTeamsのいずれかを用いて活動することとし、その選択を各グループに委ねた。

ロイロノートの利点は、複雑な作業がないため、パソコンを使い慣れていない生徒にとって扱いやすいことである。また、グループの他の生徒のPR文を見たり使用したりするときに、他者の作品データを損なうリスクが少ないことも挙げられる。

一方 Teams の利点は、アップロードされたファイルをそれぞれが編集できるため、生徒同士がグループ内で進捗状況を確認しやすいことである。また、書き方や進め方が分からないときに、グループ内の他の生徒のPR文を閲覧し、手がかりを得られることである。実際に、PowerPoint のスライドを各グループで生徒ごとに分担して作成したため、生徒は他の生徒の進捗を随時確認することができた。しかし、誤って他の生徒の作品に入力してしまうとデータが自動更新されるため、作品が意図せず損なわれるおそれがある。そのため、授業者が随時、データのバックアップを取るなどの対策が必要である。

いずれの方法であっても、ICT機器の活用は、生徒の成果物の共有やデータの加工・編集を容易にし、学習活動を効率的に行うことにつながる。特に、他者との交流から自分の文章を練り直すという点において、これまでのように原稿用紙などに書く場合には、書いている途中で他の生徒からの意見や助言を反映させることが困難であった。しかし、ICT機器を活用することで、文章を書いている途中で、意見や助言を反映させ修正することが容易にでき、活動を円滑に進めることにつながった。

また、文章だけではなく画像を用いて説明しようとする生徒もおり、PRパンフレットという視覚にも訴える作品の作成において有効であった。さらに、ICTツールを選択できることで、慣れないICT機器での活動への抵抗感の軽減を図ることができ、より主体的な活動を喚起することができた。

3 成果と課題

(1) 成果

今回、担当箇所やテーマ、対象やICTツールをグループで相談し選択することによって、「学習の個性化」を図った。生徒は、自身の『伊勢物語』『あづま下り』についての理解の深さやICTツールの選択に応じて、自分のペースで進めていた。授業以外の時間でも活動を進めることができ、おおむね各自が納得できる成果物を提出できたことが振り返りの記述からも確認できた。また、生徒はPR文の表現や構成について考えがまとまらなかったときには、ツール上でメンバーの作品を参考にすることで、手がかりを得て完成に近づけることができた。活動に対して主体的に取り組むという点において、「学習の個性化」や「協働的な学び」の効果は大きいと感じる。

また、この言語活動を通して、個別に活動する際にはメンバーや周囲の生徒に相談やアドバイスを求めたり、協働的な活動をする際には意見交換での気づきを即座に自分の言語活動に反映させようとしたりする姿が見られた。今回の実践では、授業者が想定した以上に生徒たちが工夫して自発的に「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還を行っていた。この活動を円滑に進められた要因として、ふだんの授業においても意見交換の機会を多く設定していたことが挙げられる。ふだんの授業の雰囲気や進め方が活動の充実につながると考えると、日頃から「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還を意識的に取り入れることで、生徒が主体的に学びを深める機会を提供することにつながると再認識した。今後は、この二つの活動を継続し、生徒自身が「自分の表現したいことを明確にして、それを効果的に相手に伝える力」を高められるような指導方法を更に模索していきたい。

(2) 課題

個人で作成した成果物をグループで共有し、そこで他者の作品のよさを取り入れることで自分の作品を推敲し作品を仕上げる、という展開で活動を行った。自身の作品の充実という点では一定の効果があったものの、活動が速い生徒や明確な工夫点をもつ生徒を参考にすることで、参考にした生徒と同じ

傾向の文章になってしまい、その生徒が既に作成していたPR文の魅力や持ち味が薄れてしまうような場面も少なからずあった。集めた情報を自ら吟味するという点や、言語活動における個性の発揮という点においては、他の生徒の成果物との相互参照において、自分が書きたい内容や完成像を明確にしておく指導の必要性を感じた。